

チョコレート・プロジェクト ーチョコレートから世界の現実に目を向ける力を養成する外国語学習ー

阿部 志乃

1. はじめに

小学校での授業実践を通して感じることは、外国語を学ぶ実用性を日常的にあまり感じることはない小学生にとって、その言語を使う経験を通じた「面白さや楽しさ」と、使う「必要性」を感じさせることは、学習の動機づけに重要だということである。小学校外国語教育において、ゲームなどその場での面白さや楽しさだけではなく、新しいことや知らないことを知る面白さや楽しさ、情報を得るためには外国語を使う必要があることを理解できる活動を授業で設定できれば、その後の外国語学習に前向きに取り組ませることができると考えている。そのような活動は将来の外国(語)に対する興味関心にも影響を与える可能性が高く、外国語を使う必要性を授業の中で設定することは重要であると考えられる。

本稿では上記の観点で設定した「チョコレート・プロジェクト」と、取り組んだ5年生の学習の様子とその過程での気づきを報告する。プロジェクト学習の中で児童は意識せず外国語を使い、世界の問題に気がつくことが多かった。そして児童の気づきは、教師と当初の指導計画を揺さぶるものがあった。そのことを児童の感想を通して紹介する。

2. 横須賀学院小学校の英語教育について

本校は1950年4月、前身の青山学院第二高等学校の後を引き継ぐ形で開校した小・中・高一貫の学校である。創立以来、小学校1年生から英語の授業を行っている。2012年度から小学校英語の授業数を段階的に増やし、2015年度から全学年で週3時間の授業を行っている。小学校英語科の目標は「自立した学習者」である。早い段階での英語の達人を目指すものではなく、中学・高校・大学・社会人になっても自ら外国(語)に接しようと思う人間、自分の力で外国語の学習を進めることができる人間を目指すものである。この目標を達成するためには、小学校外国語教育において「外国語を実際に使う体験」と、「その活動を支えるための学習」の2つが必要だ

と考えている。

外国語を実際に使う体験を学校現場で用意するためには、海外の学校と共同で活動することが一番である。しかし全ての活動でそのような状況を設定するのは容易ではない。そのため本校では、外国の題材や教材を通して児童が目にする・手にするものが世界につながるよう計画し、直接の交流がなくても外国(語)を使う学習が行えるようにしている。実際に外国語を使う体験を持つことで、共通語としての英語の必要性を実感し、「伝えたいことがわかった」「自分も使えた」「もっとやりたい」という気持ちを持つことが可能となる。

また、このようなプロジェクト学習を行う中で、児童の中に「わからない」「もっと上手に使いたい」という気持ちも生まれる。児童の主体的な活動を支えるための計画的な学習も必要である。具体的な指導内容は以下のものが考えられる。

- 1) シンセティック・フォニックスの指導を通して、自分の力で英語を読む・書く
- 2) 英語の文のルール(大文字で始まる、語と語の間にスペースを入れる、文の終わりのマークをつける)
- 3) 辞書を使った語彙の調べ方
- 4) 知りたい情報の入手方法(書籍、取材、インターネットなどを使った調べ学習と著作権の記録方法)
- 5) 情報のまとめ方(Lapbook¹、ノートなど)
- 6) コンピューターの使い方(インターネット、英文のタイピング、パワーポイント)
- 7) 発表の仕方(ポスター、紙芝居、プレゼンツール)

このような学習を通して児童が自分自身で活動を進めることができるようになり、「自分でできた」という達成感と、「もっと知りたい」という探究心につなげることができると考えている。また、低学年のうちから様々なメンバーでグループ活動を数多く経験することも必要である。このように実際に外国語を使う体験と、その活動を支える学習が交互に折り重なって、外国語の学びは進んでいくと考えている。

今回プロジェクトに参加した5年生は低学年時に週1時間、3年生で週1.5時間、4年生から週3時間の英語の授業を受けており、プロジェクト開始時の総授業時間数は約300時間である。初めてのプロジェクトとして、3年生でぬいぐるみ留学生を交換するTeddy Bearプロジェクト(iEARN²)をオーストラリアの学校と行い、以降は自分

¹ 一つのテーマについて調べた情報を紙フォルダに貼りつけて見やすくまとめたスクラップブック。

² 140カ国以上にある3万以上の学校や団体からなるNPO教育ネットワーク。

の名前を世界に紹介する My Name Around the World (iEARN)、自分で作成した紙人形を外国の学校と交換し、その紙人形が世界を旅する Flat Stanley プロジェクトをトルコ、ポーランド、カナダ、韓国の小学校と実施している。

3. チョコレート・プロジェクトについて

本校では以前から 5 年生を対象に、ブラジルの鶏肉の例を取り上げて児童労働をテーマに授業を行ってきた。しかし、教材がポルトガル語だったため日本語訳に頼る部分が多く、児童が直接教材から情報を得ることができないか題材の見直しを検討していた。その頃にイタリアの CLIL 実践報告でチョコレートの授業があることを知った。子どもたちはチョコレートが大好きである。児童にとって鶏肉よりも直接手にする機会が多い身近な題材であること、また日本のカカオ豆主要輸入先であるガーナでは児童労働が問題となっており、そこにつなげることができると考えた。英国でもチョコレートの授業が行われており、英語の教材や資料が豊富で手に入りやすいことも利点であった。そこで「チョコレート・プロジェクト」としてカカオ豆からガーナの児童労働へつなげる計画をし、目標を次のように定めた。

- 1) 生のカカオ豆を実際に手にして、感じたことや知りたいことをまとめる
- 2) 外国の資料を使ってカカオ豆の育ち方や加工方法を調べる
- 3) 自分たちで調べた方法で、カカオ豆からチョコレートを手作りする
- 4) ガーナのカカオ豆生産者について知り、児童労働が起きる原因に気づく
- 5) 日本にいる自分たちに何ができるか考える

児童には 4)以降の目標を先に知らせず、カカオ豆からチョコレートを作ることを始めた。チョコレートを作り終わった後に児童が興味を持ったものを中心に活動を進められるよう、歴史、消費量、生産地、世界や国内の有名なチョコレート会社といった資料を準備しておいた。

言語学習の面では以下を想定した。

- 1) 4 年生までに学習済みの言語材料(語彙・表現)を復習する
- 2) グループで協力しながら英語で書かれた資料から必要な情報を見つけてまとめる
- 3) カカオ豆の加工工程のキーワードを見つけてチョコレートの作り方を調べる
- 4) データから国名や数字が何を表しているのか読み取る

また実際の資料に接した学習、活動を自分で計画する経験を持つことを想定した。

小学生ではまだ個人で英語の資料を扱うことは難しくても、グループやクラス全体で取り組みばお互いに助け合って情報を読み取ることができる。そこで今回も 4~5 人のグループを作り、初めから終わりまでグループで活動を行なった。

4. プロジェクトの流れと児童の気づき

4.1 生のカカオ豆を見せる、実際に触らせる

最初の授業でガーナ産の生のカカオ豆を準備した。各グループに紙袋に入ったカカオ豆を手渡し、振って音を聞き、次に匂いを嗅ぎ、感じた事を 4 年生で習った「Senses」を使って表現した。次に袋から取り出し、実際に見たり触ったりしながら何かを当てさせた。

カカオ豆だとわかった後、目の前のカカオ豆について思った事 (Think、以後 T)、知りたい事 (Want to Know、以後 W) をグループで話し合った。T では「カカオ豆を初めて見た」「アーモンドに似ている」「匂いが好き／嫌い」「チョコレートの原料だ」、W では「カカオ豆の育ち方」「生産地 (日本で採れるのか)」「チョコレートへの加工方法」などが出た。カカオ豆がチョコレートの原料であることは、ほとんどの児童が知っていた。海外にはチョコレートの授業があり、自分たちも行うことを告げると、児童から歓声が上がった。W についてどんなアイデアが出たかをクラス全体で共有した後、各グループで知りたい順に番号をつけ、順位の高いものから調べていくことを確認した。

4.2 調べ学習 -カカオ豆の産地からチョコレートへの加工方法-

英国の教材³や英語の初心者用地図帳⁴を紹介し、各グループで自分たちの W について調べた。これらの教材は写真や絵が豊富で、どんな情報が書かれているかイメージをヒントにすることができる。カカオ豆は Cacao Belt と呼ばれる地域でしか育たないこと、カカオの木や花・実のつき方、Cacao Pod の収穫や加工工程など、各グループで調べたことを問題にしてお互いにクイズを出し、情報をクラス全体で共有した。

日本では収穫できないことを知り、目の前のカカオ豆はどこから来たものか児童の

³ C.J. Polin (2005) *The Story of Chocolate*, DK Readers.

⁴ Anita Ganeri and Chris Oxlade (2004) *DK First Atlas*, DK Children.

関心が集まった。そこで日本のカカオ豆輸入量のデータ⁵を読み、日本は主にガーナから輸入していることを知った。ガーナの位置、国旗や有名なものを初心者用地図帳で確認した。

次に、目の前のカカオ豆もガーナから届いたものであること、この豆からチョコレートを手作りすること、ただし作り方は教師からは教えず、各グループで調べた通りに手作りするのを伝え、必要な道具や加工工程をグループで確認した。英語の資料には Clean - Roast - Separate the shell - Grind (grind) - Warm - Mix sugar と工程が説明されていたが、児童はどんな道具を使ってどのように行うかを考えなくてはならない。しかしチョコレート作りで児童の「詳しく知りたい」「絶対成功したい」という気持ちは高まっており、授業外でもグループで相談し、家族の人に聞く、図書館の本で調べるといった自発的な準備が行われた。

4.3 チョコレート作り

調理実習は 90 分で、各グループで準備した道具を使い Clean - Roast - Separate the shell - Grind (grind) - Warm - Mix sugar の手順を実施した。オーブントースターやフライパンを使用して Roast し、Separate the shell では手作業で小さなかけらも大切に拾いながら、Grind はすり鉢を使って行った。湯煎しながら Warm - Grind を繰り返す過程で、カカオ豆がだんだん溶けていく様子が不思議だと感じていた。事前の調べ学習のおかげで失敗するグループはなく、非常に満足した時間となった。試食では大切そうに少しずつ味わい、家族に見せたいと全員が食べ切らずに自宅へ持ち帰った。児童からは「家でも作りたい」「カカオ豆はどこで買えるのだろう」「ガーナの方はカカオ豆がすぐ手に入るから、いつでもチョコレートを手作りできて羨ましい」という感想が出た。

4.4 データから情報を読み取る

日本は米の主要産地であり消費国であるように、児童はカカオ豆の産地はチョコレートの消費国でもあると思っていた。そこでチョコレートの生産・消費量について世界ランキングのデータ⁶を見た結果、上位にはヨーロッパの国々が多く、カカオ豆の主要

⁵ Chocolate and Cocoa Association of Japan (2015) *Import of Cacao Beans, Japan*.

⁶ Niall McCarthy (2015) *The World's Biggest Chocolate Consumers*, statista.

生産国は1つも入っていないことに児童は気がついた。ガーナは世界で2番目にカカオ豆を生産しているにも関わらず、チョコレートの生産や消費量は世界のランキングに入らないのはなぜか、児童は強く疑問を持った。ある児童から「ガーナではチョコレートは食べられていないのだろうか」という発言があった。ここから「ガーナではチョコレートは人気がないのか」「チョコレート工場はガーナにはないのだろうか」「カカオ豆を違う形で消費しているのではないか(例えば料理に使う)」という意見が続き、ガーナのチョコレート事情について児童の関心が高まっていった。そこで、ガーナのカカオ農家について知るために、用意していた児童労働の教材を使用してワークショップを行うことにした。

4.5 チョコレート産業についての学習

ガーナのカカオ農家について知るために、ACE⁷が作成した「おいしいチョコレートの真実」という教材を使用してワークショップを行った。これはロールプレイを通してカカオ産業の児童労働の現状と自分たちの生活とのつながりを知り、児童労働をなくすための行動を起こしてもらうことを目的としたワークショップ教材である。児童の活動は以下の通りである。

- 1) ガーナ・日本の家族になりきってそれぞれの予算でお買い物ゲームを楽しむ
- 2) 各家族の買い物内容をお互いに説明しあって共有する
- 3) カカオの価格下落による生活の変化を体験する
- 4) 活動を終えた後、各家族の変化を見て、感想を話し合う

登場する家族はカカオ農家(個人経営、大農場)、ガーナ政府の役人、日本のチョコレート工場長、チョコレート会社の社長で、全ての家族が一つのチョコレートを作るのに関わっている。グループでくじを引き、それぞれ一つの家族になりきって活動を行った。1)ではガーナ、日本とそれぞれに決まった給料から最低限かかる生活費を引き、余ったお金で欲しいものを購入する。3)ではカカオ豆の豊作で価格が下落し、ガーナの家族と日本の家族でそれぞれの収入の変化を体験をする。活動の中で、カカオ農家は住居や食費、光熱費で収入のほとんどを使っており、チョコレートや娯楽品を買う余裕はあまりないこと、カカオ豆が豊作になって収入が増えるかと喜んだにも関わら

Chocolate and Cocoa Association of Japan (2013) *Selected Countries of The World Chocolate Production & Consumption, Japan.*

⁷ 児童労働の撤廃と予防に取り組む国際協力 NGO。

ず、原価が下がって収入が減少したことに児童は衝撃を受けていた。一方、日本の家族のグループは仕入れにかかる費用が減り収入が増え、大喜びをしていた。

最後の話し合いではガーナの家族を体験した児童たちの不満が爆発し、日本の家族対ガーナの家族で口論となった。ガーナ側の意見は「日本は儲かっているんだから、もっと高くカカオ豆を買うべきだ」「カカオ豆が豊作なのに、取れば取れるほど安くなるのは納得がいかない」「同じチョコレートの仕事をしているのだから、給料も平等にするべきだ」「もう日本にはカカオ豆を売ってやらない」、日本側の意見は「チョコレート工場がないとカカオ豆の価値はなくなるから、チョコレートを作って売っている自分たちのおかげでガーナの人には仕事がある」「嫌ならカカオ農家をやめて、もっと儲かる別の仕事を探せばいい」「カカオ豆はガーナ以外の国から買うから、別に売ってなくてもいい」といったものが出た。白熱した口論の中、あまりに責められた日本側の児童が悔しくなって「そんなに責めるけど、結局自分たちは全員日本人ではないか」と発言した。その発言を聞いて、教室が静まり返った。アクティビティを通してガーナの家族から出た不満は、全部自分たち(日本)に対して当てはまることに気づいたからであった。この日の振り返りでは、「色々文句を言ったが、自分たちも本当は日本側の人だから残念だ」「日本の会社はカカオ豆をもっと高く買うべきだ」「同じチョコレートに関わる仕事をしているのに、どうしてこんなに差が出るのだろうか」「どうやったらカカオ豆を高く買うことができるのだろうか」「誰がカカオ豆の値段を決めているのだろうか」などと、児童から様々な感想が出た。

この話し合いの後、計画ではガーナのカカオ農園で働く子どもたちの様子を写真で見せ、児童労働について進めていく予定であった。しかし、今回のワークショップで貿易の仕組みや貧富の格差について体験し、十分にショックを受けている児童に対して、さらに児童労働について取り上げるべきか迷った。児童の話し合いの様子を見ていて、事前に子どもたちの心の動きを予想していなかったこと、また小学生ではその後の活動に限界があることも気づき、児童労働へつなげようとしていた教員自身の思慮不足を感じた。そこで予定していた授業計画を変更し、ワークショップで登場したガーナのカカオ農家について、再度クラス全体で考えてみることにした。

4.6 ガーナのカカオ農家について考える

ガーナのカカオ農家を取り上げ、家族構成や収入、生活費についてももう一度確認をした。個人で経営する農場では収入は不安定で少ないこともわかった。自分たちが

この家族の一員だとしたら何ができるだろうか、家族全員で一緒に暮らしていくためにはどんなことができるか、グループで考えクラス全体で共有した。全てのグループから「自分たちも農園で一緒に働く」「自分たちでもできる仕事を見つけて、収入を増やす」という意見が出た。

次に絵本⁸を使って、ガーナの子どもの生活について知ることにした。また日本に研修できているガーナ人留学生を招いて、ガーナでの子ども時代について話を伺った。お手伝いは当たり前だったこと、自然の中で自分たちで考えて遊んだ楽しい思い出、決して豊かではないかもしれないが家族の絆は強く愛情に溢れていること、みんなが今の生活を良くしていこうと動いている話は、児童にとっても教員にとっても心に響くものがあった。今回のプロジェクトはこのまま Open End で終了した。

プロジェクトを終えての児童の感想は「日本にいる自分たちはもっとチョコレートが高く買うべきではないか」「カカオ豆の値段を安定させるにはどうしたらいいのだろう」「作ってくれた人に感謝してチョコレートを食べるようにする」「募金活動を行いたい」という内容が多く、「将来は穀物取引所のトレーダーになりたい」というものもあった。

5. おわりに

プロジェクトを計画した時、最後は児童労働へつなげるつもりであった。しかし活動が進むにつれて児童労働について知ることは大切だが、教師から提示する形は違うと感じた。それは教師の視点での計画であり、児童が理解し共感するためには自分自身で気がついていかななくてはならず、そのための活動を教師が手伝うというのが児童にとって自然な学びだと気がついたからである。今回のプロジェクトでは次の活動に結びつけることはしなかった。しかし、プロジェクトを始める前と後では児童のチョコレートに対する考えが変化し、カカオ豆の輸入といった経済格差に対しても疑問を持つきっかけになった。今後児童がチョコレートを手に取る時には、以前とは違う視点で購入するだろう。このプロジェクトの成果が出るのは今ではなく、もっと後になってからだと考えている。

チョコレートを作る活動後の感想で多かった事項は、カカオ豆に詳しくなれたこと、チョコレート作りが楽しかったこと、外国にはチョコレートの授業があつて羨ましいなど

⁸ 谷川俊太郎(2011)『そのこ』、晶文社、株式会社 budori(2016)『とりがおしえてくれたこと どもにつたえるフェアトレード』、株式会社 budori。

の感想で、英語について触れたものは「英語で調べたから大変だったけど楽しかった」という意見が数件であった。児童にとって英語の資料に取り組んでいる時に苦労はあったし、覚えた英語もなかったわけではない。しかし、それが目的のためには必要だったため、特別なことという感想は生まれなかったのではないか。つまりこのプロジェクトの間、児童は活動そのものに夢中になっており、その内容や作り方を英語で学んでいるという自覚はあまりなかったと考えられる。英語そのものにフォーカスを置くのではなく、英語は世界につながる学びを支える 1 つのツールであることを体験できるような活動が、小学校における外国語教育には必要ではないか。外国語を通して広い世界を見る、新しいことを知る経験を持つことが、子どもたちの将来に続く外国語の学びにつながると考える。

(横須賀学院小学校)

Chocolate Project:
Foreign language activities through learning about chocolates to
help pupils see a global issue of economic disparity

Shino ABE

For a life-long motivation of pupils toward learning a foreign language, experience of having fun when using the language and basic skills of self-study are indispensable. Yokosuka Gakuin Elementary School implements project studies through English lessons. The school makes using English a necessity as a communication tool in classrooms, so that pupils acquire a willingness to communicate in foreign languages. Project studies also give an opportunity to learn about global problems and create positive perceptions about international understanding. In this practical report, pupils enjoyed cooking chocolate and researching in English. While doing so, they gradually realized the background of economic problems and gained some understanding of one of the global issues, namely, economic disparity.